



見捨てられた万能者は、 やがてどん底から成り上がる 4

Q L P H Q L I G H T

グリゴリ
Gurigori



アルファライト文庫



シリウス

身勝手な理由でクロードをパーティから追い出した、「銀狼の牙」の元リーダー。野望を抱いて、魔王に降ったが……？

ハウザー

魔王軍四天王の一人。各地で暗躍している。

レイア

雌のシルバーフェンリル。オークに襲われているところをクロードに助けられた。

ナビー

クロードの参謀役の女の子。元はレベルアップを告げるだけの概念だったが、彼に体を与えられた。

クロード

本作の主人公。超器用貧乏なジョブ「万能者」である事を理由にパーティを追放された。

ルーチェ

クリエール王国の第二王女。冒険譚が好きでクロードの大ファン。

エルリナ

真っ直ぐな性格をしたエルフの女性。故郷を離れ、現在はクリエール王国の諜報員として活動中。

MAIN CHARACTER

登場人物紹介

第一章 へんきょう辺境の地マー"デイク

クリエール王国最強のSランクパー"ティ『銀狼の牙』を追い出された元荷物持ちの少年、クロード。

一度は失意に沈んだ彼だったが、一定の動作を繰り返す事でスキルや魔法を習得出来る特別なジョブ——『万能者』を駆使し、どん底から成り上がつていく。

クロードが率いる冒険者パーティ『天の祝福』は、王都を襲つたスタンピードを解決した事で、一躍名を馳せた。

ムーンスター"エンリルのレイアやその子供である五つ子狼に加え、レベルアップア"ナウンスに彼が肉体を与えた少女……ナビー。

クロードはそうした『天の祝福』の面々に加え、リーダーのシリウスがいなくなつた事で和解した『銀狼の牙』に所属する少女達と共に、複数のパー"ティが集まつて結成するチーム——クラン『守護者の集い』を結成。

あつという間にAランククランに昇格して、各地から舞い込む依頼に奔走する日々を

送っていた。

クロードがクリエール王国の第二王女、ルーチエとのティータイムデートを楽しんでから、数日が経つたある日の事。

彼を含む『守護者の集い』のメンバーは珍しく受けている仕事がなく、みんな思い思いで休日を過ごしていた。

クロードが迷宮都市不ツクにあるクランハウスに併設された牧場で家畜の世話をしていると、クランハウスの方から何者かが近づいてくる気配を感じた。

作業の手を止めずに、クロードは『気配探知』で相手の素性を確認する。

（ん？　これは……王都の屋敷の管理を頼んでいたルシファーの配下か……何かあったのか？）

クランハウスを出て、クロードが召喚した悪魔族の実力者——ルシファーの配下は、真っ直ぐこちらに向かってくる。

クロードは近づいてきた相手に声をかけた。

「君には、王都の屋敷の管理をお願いしていたはずだけど……こんなところまでわざわざやつて来るなんて、そっちで何かあつた？」

「……はい。王都の屋敷に国王の使いが訪れておりまして。いかがいたしますか？」

「そうか。国王陛下の……」

報告に来た相手にバレないよう、クロードは小さくため息をつく。

（王都の屋敷に使いを寄こしてまでなんの用だ？　俺に何かしらの話があるのなら、パルを通して『念話』してくれいいのになあ）

国王のところには、精靈族のシャリナの配下——大樹の精靈、パルがおり、クロードの命令で、双方の伝達役を担つてている。

「わかった。これから会いに行くよ。屋敷の応接室に通しておいてくれ」

「かしこまりました」

クロードは一足先にルシファーの配下を王都に帰し、クランハウスに戻つて身支度を整えた。

そして仲間達に少し留守にする旨を伝え、足早に転移門を通り、国王の使者が待つ王都の屋敷の応接室に向かったのだった。

応接室には、優雅に茶を飲むオーゲスト宰相がいた。

「宰相閣下!? お待たせして申し訳ありません……それで今日は何故こちらに?」

「ああ、今日はクロード君……もとい、ブレイク伯爵殿にこれを渡そうと思つてね」

オーゲストはクロードを家名で呼ぶと、傍らに置いていたカバンから何かを取り出し、机に置く。

「……? この書類は?」

クロードは机の上に並べられた書類を手に取り、確認した。

紙をめくる彼に、オーゲストが言う。

「それは、王都の直轄領マーデイク領とその周辺が載つてゐる地図だ。以前話した通り、この地を君に治めてもらいたい。他の資料には、これまでに確認されたマーデイク領で採取出出来る資源をまとめた。領地を治めてもらうにあたつては色々と準備中だが、渡せる情報を先に共有しておこうと思つてね。有意義に活用してくれ」

「ありがとうございます。どんな資源があるのか知れただけでも、大助かりですよ。宰相閣下」

クロードが頭を下げる。オーゲストは微笑んだ。

「そうか。それはよかったです……今はまだスタンピードの後始末で王城がバタバタしていて

な。とはいへ、数日中には国王陛下からパル殿を通してお声がかかるはずだ。その時にマーデイク領についても話があるだろう。それまで、ブレイク伯爵殿には王都の屋敷、もしくはクランハウスにて待機を命ずる。以上だ」

オーゲストの指示に、クロードは頷いた。

用意された茶をしつかり飲み干し、オーゲストはブレイク伯爵邸を出ていった。

王都の屋敷からクランハウスに帰つてきたクロードは、作業が途中になつていていた牧場へ向かう。

牧場では、クロードが途中で放置していた作業をケイト、アイリ、マルティといつた『銀狼の牙』の面々が黙々と進めてくれていた。

「クロード、戻つてきたのか。畑と牧場の手入れはもう終わる。クランハウスに帰つて休息しよう」

ケイトはクロードの手を握り、アイリ、マルティと一緒にクランハウスへ戻つた。

屋敷の中にあるラウンジに入る。

そこでは従魔のレイアとマールが人化した姿でカウンター席に腰かけ、グラスを傾けていた。

「お！ 一人とも昼間つからお酒かなあ？」

「もう、小言言うな。アリよ。もう四時じやし、昼間というよりは夕方じや。それには今日はたまの休暇。少しくらい呑んでもいいじゃろう」

マールは頬をぶくぶく膨らませて、アリに反論した。龍王国の元女王にしてエンシェントドラゴンであるマールだが、レイアと共に人化していると、可愛らしい女性にしか見えない。

「まあ確かに。今日は休暇だしねえ。私達も少し呑もー」

アリはカウンター奥にいるゴーレム——魔道具に精通した悪魔族のアモン製——に、ドリンクを注文した。

ゴーレムがアルコール度数低めのカクテルを作り始める。

クロードがケイト達と四人がけの席に座り、待つ事数分。

お酒の入ったグラスを四人分持ち、カウンターを出たゴーレムがこちらにやつて来た。グラスをテーブルに置き、持ち場に戻っていく。

「……本当に凄い魔道具ね」

アリがグラスに入ったお酒をまじまじと見て、呟いた。

その隣で、マルティも同意を示す。

「ええ、本当にアモンさんの作るゴーレムさん達は凄いです。このお酒を造つてくれたゴーレムさんしかり、洗濯や掃除、果てには食事を作つてくださるゴーレムさん。どれも素晴らしい働きをしてくださる方ばかりです」

広いクランハウスで暮らすクロード達だが、アモンのゴーレムが家事をこなしてくれているおかげで快適に過ごせている。

マルティの意見には、ケイトも同感だ。

「そうだな。今から今日の夕食が楽しみで仕方ない……話を変えるが、王都の屋敷には何をしに行つていたんだ、クロード？」

「ああ、実は宰相閣下が国王陛下の使者としていらっしゃつていてさ。これをもらつたんだ」

クロードはオーブストからもらったマーデイク領の地図や、そこで採れる資源のリストをテーブルの上に出した。

「……これがクロードの領地になる辺境の地図か」

ケイトの呟きが聞こえたのか、カウンターでお酒を呑んでいたレイアとマールが寄つてくる。

クロードはテーブルを覗き込んでくるマールに、書類の一つを渡した。

「こつちの書類には、マーデイク領で採取出来る資源がまとめられているんだ。よかつた
ら読んでみて」

「……ほお～。これ程の資源が採れるとはのう。ここを開拓するのじゃろう？ 領地に行
く日がますます楽しみじゃのう」

その後、クロードはナビーやベロニカ、ミレイといった、ラウンジにいなかつた『守護
者の集い』のメンバーにも、今回の情報を共有。

充足感に包まれて眠りに就いた。

なお、コックゴーレムの作ってくれた夕食は、例に漏れず大変美味しかつた。

王都の屋敷でオーラグストから書類をもらつてから何日かした頃。

彼の言つていた通り、パルの力を借りた魔王から『念話』が届いた。

『おお、クロード。連絡が遅くなつて悪かつたな。こつちもバタバタしておつて、やつと
落ち着いたところだ……こちらも落ち着いたし、いよいよお前達にはマーデイク領を訪ね
てもらおうと思う』

ここ数日ずっとマーデイク領について思いを馳せていたクロードは、待ち望んでいた指
示に拳を握つた。

『……やつとですか。俺達はいつまでにこつちを出ればいいんですか？』

『うむ。その事だが……お前達には至急、マーデイク領へ向けて発つてほしい。こちらか
らも開拓のための作業員を派遣しておるのだが、難航しておつてな。というのも、マーデ
イク領の大半を占める魔の大森林の木は、堅牢木けんろうぼくというのだが……Aランクの大型モンス
ターの体当たりでもビクともしない硬さなのだ』

『じゃあ、まさか……』

『……うむ。土地の開拓は、お前達「守護者の集い」に全面的に任せせる。頼めるか？』

魔王の言葉に、クロードは少し思案してから頷いた。

『……なるほど。わかりました。とはいへ、俺達にも諸々の準備があります。そうです
ね……二日後にマーデイク領に向けて発ちます』

その後は他愛ない近況報告をして、クロードは魔王との『念話』を終えた。

自室を出て、クランハウスにある執務室を目指す。

執務室では、執務専用ゴーレムが『守護者の集い』が遂行した依頼の決算処理を行つて
いた。

ゴーレム達に交じり、クランの経理や依頼受付といった事務を担当するミレイも作業に勤しんでいる。

「ミレイ。今ちょっといい？」

「ええ、大丈夫だけど……どうしたの、クロード？」

「少し話があるんだよね。一階のラウンジまで来てほしい」

「わかったわ。この書類を片付けたら行くから、先に行つていてくれる？」

クロードは執務室を出た。

そして、ルシファーを召喚して他のクランメンバーをラウンジに集めるように指示すると、一人ラウンジへ向かった。

クロードがラウンジで待つ事しばらく。

『守護者の集い』のメンバーが集結した。

「みんな、急に集まつてもらつてごめん。さつき国王陛下から、マーデイク領の開拓について指令が出た」

仲間達が目を瞠る。みんなを代表して、ナビーが尋ねる。

「……それで、国王陛下はなんと？」

「うん。それが——」

クロードは国王と話した内容をみんなに共有した。

「……なるほど。確かに、国王様がおつしやるように、作業員の方々の実力では開拓が困難な土地がもしませんね」

ナビーに続いて、マールが言う。

「宰相にもらった地図に、マーデイク領とその周辺に生息しているモンスターが載つておつたが……以前行つたドラゴンマウンテンの樹海に棲むモンスターと、遜色のない力を持つているようじやのう。この国にはモンスターの討伐を任とする騎士団がおるが、彼らが本来の仕事と並行して開拓を行つるのは厳しかろう。ここはわし達で開拓を進めるのが良さそうじやな」

その日、クロードは自分達が留守にする間の諸々の作業について、ルシファー、シャリナ、天使族のミカエルといった召喚組と、そして彼らの配下に引き継ぎを行つた。

もし何かトラブルが起きても迅速に対応出来るようにし、マーデイク領遠征の準備を終えたのだった。

＊＊＊

国王から念話が来てから二日が経つた。

今日はついにクロード達『守護者の集い』がマーデイク領へ向かう日だ。

『守護者の集い』のクランハウスでは、居残り組のミレイ、魔界から呼び出されたアモンと彼女が作り出したゴーレム達、そしてルシファー達召喚組の配下が玄関まで見送りに来ていた。

戦闘力に乏しく同行出来ないミレイが、心配そうに口を開く。

「みんな、気を付けてね。私もそっちが一段落したら応援に行くから」

「うん、それまで留守を頼むよ」

クロードはミレイ以外の『守護者の集い』のメンバーを連れ、マーデイク領へ旅立った。

『守護者の集い』がクランハウスを発つてから三日後。クロード達遠征組はマーデイク領に足を踏み入れた。

マーデイク領は、クランハウスがある迷宮都市ネックとは真逆の方向にある土地だ。そ

れにもかかわらず僅か三日で移動出来たのには、理由がある。

まずクロード達はヘロニカの生家——ミーガン子爵家が治めるミーガン領の都市マイルに、転移魔法で移動した。

そこからは特製の大型馬車に乗り、ミーガン領に隣接するマーデイク領を目指したのだ。そんな旅を経て辿り着いたマーデイク領だが……クロード達の目に映る木、木、木。

彼らの目の前には、まさに樹海と言わざるを得ない光景が広がっていた。
「……凄い光景ね。なんでこの地の名称が魔の大森林のかしら。絶対に魔の大樹海の方が合っているわ」

みんな、アイリの意見に大賛成だ。
見渡す限りの木、木、木……そして、先程から絶えず聞こえてくるモンスター達の唸り声。

絶対に樹海の方がピッタリな名称である。

「……さあ、気を取り直して作業に取りかかろう」

クロードの号令によつて、『守護者の集い』は開拓を開始した。

まずは眼前に広がる木々を刈らねばならない。

魔法が使える者は、【ウインドカッター】、【アイスカッター】といった風や氷の刃を放ち、

複数の大木を同時に切り倒す。

魔法に長けていない剣士職の面々は剣を斧に持ち替え、自身の筋力にものを言わせて、力任せに木々を叩き切るのだつた。

魔の大森林に生い茂る木々を伐採し続けていると、あつという間に夜になつた。夜空には星が瞬いでいる。

夜行性の凶暴なモンスター達が目覚めてきたのか、周囲からは、ここに来た時よりもさらに荒々しいモンスター達の唸り声が聞こえ始めていた。

「みんな、今日の作業はもう終わろうか」

クロードはそこ中に散らばっている木をアイテムボックスにしまい、代わりに内部を魔法で拡張した魔道テント（豪邸型）を取り出した。

切り開いたばかりの場所にテントを設置し、辺りにモンスター除けの結界を張つておく。一同はテントに入る。

「キツチンでコックゴーレムが夕食を用意してくれるから、俺達は先にお風呂に入っちゃおうか。食事の準備が出来る前に、汚れを落として溜まつた疲れを取りたいし」

「そうだな、クロード。私もスッキリしてから食事にしたい。他の者もそれでいいか？」

ケイトは後ろを振り向いて問いかけ、仲間達から了承を得た。

全員で大浴場へ向かい脱衣所に入ると、ケイト、アイリ、マルティが急にモジモジする。一緒に暮らし始めてかなり経つたが、三人はまだ全員で……というより、クロードと一緒にお風呂に入る『天の祝福』の習慣に慣れず、羞恥心を覚えているようだ。

（こればかりは慣れてもらうしかないからな。ケイ姉達が嫌なら無理しなくていいんだけど、除け者にされたくないみたいだし……）

クロードはケイト達三人に極力配慮し、先に大浴場に入つた。

しかし、そういう時程トラブルが起くるものである。

体に大きめのバスタオルを巻き、クロードのあとに続いて大浴場に入つたケイトだが……

「うわっ！」
「うわっ！」
「咄嗟に体を捻つたものの、クロードはケイト諸共タイルに倒れ込んでしまう。
へ突つ込んだ。

「ううう、いた……！ いつたいなんだ？ ケイ姉、平気？」



クロードが身じろぎすると、彼を下敷きにしていたケイトが震えた。

「あん……！ あつ、クロード！ う、動かないでくれ。下腹部が当たって、こ、擦れる！」

ケイトの言葉を聞いて、クロードは瞬時に事態を理解した。

慌てて身を起こしてケイトから離れ、「こ、ごめん！」と顔を背けて謝罪する。

「……い、いやいい。気にするな。私が滑つてぶつかってしまったのがいけないんだ」

顔を真っ赤にしたケイトは、俯きがちに言った。

そして、そそくさと湯船へ向かっていく。

気まずいクロードとケイトを除き、『守護者の集い』は和氣あいあいとお風呂を堪能するのだった。

その後、大浴場を出た一行はリビングで食卓を囲み、明日に向けて眠りに就いた。

＊＊＊

翌日。

開拓したばかりの土地の中でも小高い丘のようになっている場所に、クロードは領主邸となる屋敷の基礎を作り上げた。

「屋敷の基礎にはどうしても石材が必要だったから、魔の大森林に大きめの岩がいくつもあつて助かった。この量なら、あとで作る城下町の建物なんかの分も間に合いそうだし、よかつたよ」

クロードは、仲間達が伐採する木々を黙々と木材へ加工していくた。

屋敷に使用する木材の確保を優先しているうちに日が暮れたので、実際に屋敷を建てるのは翌日にする事にした。

次の日。ついに領主邸の建設着工の日である。

スキルも魔法もアイテムも、なんでも作れるアルティメットスキル——『創造』を使えば、あつという間に豪邸を築けるのだが、今日はそうしない。

何故なら、クロードはこの日のためにアモンに秘密兵器を用意してもらっていたからだ。アモン謹製建築ゴーレムの、お披露目の瞬間である。

クロードはアイテムボックスから建築ゴーレムを数体取り出すと、彼らを連れて建設現場となる小高い丘の頂上へ向かった。

早速、ゴーレム達は昨日クロードが準備した木材や、建築道具である工具を担ぎ、作業を開始する。

ゴーレム達が建築を進めていた間、クロードは仲間達と共に開拓した土地をさらに拡張し、城下町を作るスペースを確保するための伐採に精を出した。

伐採を始めてから数時間後。夕焼け空に星が見え始めた頃、領主邸が出来る小高い丘を中心、半径十キロ程の開拓が終わつた。
そして小高い丘の上には、遠くからでもわかるくらい立派な三階建ての屋敷が出来上がつていた。

帰る道すがら辺りを見回していたクロードは、完成した領主邸を見て目を丸くする。
「……え!? もう出来たの!?

クロード達はゴーレムが作り上げた三階建ての屋敷の目の前までやつて來た。

「まさかたつた半日で屋敷を完成させるなんて……流石アモンの作ったゴーレムだな。他のゴーレムの例に漏れず、彼らも優秀だつたみたいだ」

クロードが呟くと、他の者も頷く。そして、クロード達は屋敷の中へ入つた。
領主邸の内装は、王都の屋敷を参考にしている。外観以外は特に変更しておらず、間取

りや調度品も全く同じだ。

クロード達はダイニングでコックゴーレムが作ってくれた弁当を食べ、次の日に備えてそれぞれの自室で眠りに就いた。

開拓生活、四日目。

クロード達は朝からリビングに集まり、テーブルに大きな紙を広げて、これから作る城下町の相談をしていた。

紙の上に屋敷の場所を書き込んだクロードは、それを閉うような円を描く。この円が、城下町の予定地だ。

「まず、領主邸を中心街を四つの区画に分けて……」

二本の線を引き、城下町予定地を四つの区分に分ける。

そして、図面を指差して言った。

「よし。みんなに意見を聞きたいんだけど……街に、何が欲しいかな?」

「そうね。私としては東に商業区、西に工業区、そして南と北に居住区と、目的別に区画

を使い分けるのがいいと思うわ」

「なるほど……アイリさん、商業区と工業区を東西に置こうと思った理由を、具体的に教えてくれない?」

クロードが尋ねると、アイリは説明を始めた。

彼女によると、商業区を東に置く事で隣のミーガン領や、その先にある王都との距離が近くなる、既存の街道も利用出来る……といったメリットが多く、こちらに商業区があつた方が他領とのやり取りを円滑に行えるとの事だ。

また、工業区を西に置く理由は、魔の大森林に近いからだそうだ。

魔の大森林はモンスターの巣窟だが、冒険者や兵士がいれば十分に抑止出来る。魔の大森林で採れた素材を、街の中に運ぶ手間を減らせるのではないか……という話だった。「確かに。アイリさんの言う通りにした方が、色々と上手くいきそうだな。何かトラブルが起きたら、その都度領民達に意見を求めて改善していく事にしようか」

他にも仲間達のアドバイスをいくつか聞き、クロードは話を終わらせた。
そして描き上げた図面を丸めてアイテムボックスにしまい、みんなを連れて屋敷の外に出たのだった。

外では、現在進行形で建築ゴーレム達が働いていた。領主邸の直ぐそばに、小さめの離れを建てるためだ。

この離れには、クロードが辺境の地で役に立ちそうな道具を作るための鍊金室や、みんなの趣味のための部屋が設けられる予定だ。

クロード達の注文が細かすぎたようで、離れの建設の進捗はまだ半ば程である。

離れの完成度を確認したクロード達は、その場を離れた。そして、あらかじめ用意していた石材を用い、土魔法で小高い丘から下りる道や、緩やかな石畳の階段を作る。階段が出来れば、次は屋敷が立っている丘を囲う防壁……言わば、第一防壁の建設に移った。

クロードは仲間達と別れて、一人で丘を下りる。そして十分な距離を取ると、地面に手を当てて土魔法を行使した。

すると――

ゴゴゴゴゴ――!!

丘を囲うように高さ七メートル、横十数メートル、幅五メートル程のゴツイ壁が出現した。

クロードは同じ事をさらに数回行つて、丘を完全に囲う。そして、仲間達と協力して武

骨な土の壁を整備していった。

防壁の整備が終わる頃には、クロード達の要望満載の離れもほとんど完成していた。あとは最後の仕上げを残すだけだ。

「この離れが出来れば、これから出来る街の防衛に必要な魔道具を作れるね」

「はい。ですが、今日は既に日が落ちています。魔道具の製作は明日からになさつてはいかがですか?」

ナビーの指摘はもつともだ。クロードは素直に従い、その日の仕事を終わらせた。

その後は夕食をとつて風呂に入ると、みんな早々に就寝するのだった。

翌日。クロードは今朝完成したばかりの離れにて、魔道具の製作に取りかかっていた。この離れには大小様々な個室がある。

クロードが今いる部屋は、地下にある鍊金室だ。

ここはクロード、そしてアモンが魔道具を製作する部屋であり、クロードは今、街を覆おお

う結界を張るための魔道具を試作していた。

「えっと、結界の形状はドーム状にして……街に入ろうとする人物やモンスターの悪意や敵意を感じて、危ない奴を弾けるようにして……範囲は……試作品だし、とりあえず鍊金部屋が収まる位の大きさで……」

クロードは自らが編んだ魔法陣を、準備しておいた水晶玉に封じ込める。これで結界の魔道具の試作品が出来た。

完成させた魔道具を置き去りに、クロードは鍊金部屋を出た。遠隔で魔道具を起動させると、ドーム状の結界が部屋を覆うように展開される。

「きちんと結界が働くかテストしよう」

——バチン！

扉を開けようとした彼は、水晶玉に組み込んだ魔法陣の設定通りに、結界に弾かれてしまった。

「よし!! 成功だ。あとは完成品を作つて、領主邸の地下に作つた部屋に設置すればいい……そうだ。完成した魔道具を置く台座も作らないと。丁度石材が余つているし、それで作るか」

そうして、クロードは結界の魔道具の製作と台座作りに没頭した。

昼食の時間を知らせにきたケイトによつて作業が中断させられるまで、部屋には鍊金術が生み出す金色のsparkが輝くのだった。

結界魔道具を完成させて、領主邸の地下室に設置、起動させた翌日。

クロードは国王と宰相のオーラグストに作業の進捗を報告すべく、転移魔法で王城を訪れていた。

「——というわけで、城下町の予定地には結界を張り終えました。領都開発のため、人員の派遣をお願いします。結界内は絶対に安全ですので、騎士団の方々は少人数で結構です。出来れば、大工などの建設業の人達を多く派遣していただけます」

「うむ。わかった。早速手配しよう」

そう言つた国王がオーラグストへ視線を向け、小さく頷く。

直ぐにオーラグストが席から立ち上がり、一礼して退室していった。

「しかし、結界の中は安全なのか……では、ルーチェをそちらに行かせててもいいかもしね

伯爵よ」

「……ええ、そうですね。領主邸は既に出来ていますので寝泊まりには困りませんし、ルーチエ様には契約精霊のパルが付いています。戦力的にも問題ないかと」

「そうか。では、マーデイク領に戻る時に、ルーチエを連れていくつてやつてくれ。あの子も喜ぶだろう。頼んだぞ、ブレイク伯爵」

国王にルーチエを連れていくように言われたクロードは、応接室を出て、ルーチエの私室に足を運んだ。

——コン、コン。

クロードがルーチエの部屋の扉をノックする。

すると、中からウキウキしている気持ちを感じさせるかのように元気な声が聞こえてきた。

「はい！ どちら様ですか？」

「クロードです。お迎えに参りました。俺と一緒にマーデイク領へ行きました」

ルーチエは勢いよく部屋の扉を開けた。

「お待ちしておりましたわ!! 話は父とパルから聞きました。旅支度も既に済んでおりま

すのよ。クロード様、さあ参りましょう。『天の祝福』や『銀狼の牙』の皆様にお会いするには、久しぶりですね。とても楽しみですわ」

そう言って、ルーチエは荷物が詰まつた大型のトランクケースを部屋から運び出そうとする。

そんな彼女を、お付きのメイドが制止した。

「ルーチエ様。はやる気持ちはお察ししますが、まだお待ちを。今回はマーデイク領へ派遣される人員と共に移動なさるのでしょうか？ 国王陛下の人員手配が完了するまで、まだ時間がかかりますわ」

「おつと、そうでしたわね。クロード様にお会い出来た事が嬉しすぎて、失念していましたわ……クロード様、準備が出来るまで私の部屋でお茶でもいかがでしようか？ 今までの冒険の話を聞かせてくださいませ」

使いの者がやつて来たのは、冒険の話をしつつお茶を飲んで時間を潰し始めてから、丁度三時間が経過した時だった。

「失礼いたします。ルーチエ第三王女殿下、ブレイク伯爵閣下。マーデイク領へ派遣する人員の準備が整いました。大人数ですので、王城の中庭に待機させています。国王陛下と

ないなあ。あやつもお前達に中々会えなくて毎日寂しがつておるのだ。どうだ、ブレイク

宰相閣下も既にいらつしやつておりますよ」

クロードとルーチエは、使いの者に連れられて中庭に向かつた。

中庭には、百人を超える大工と国王、そしてオーグストが待っていた。

「国王陛下、宰相閣下。ルーチエ第二王女殿下とブレイク伯爵閣下をお連れいたしました」

「うむ。ご苦労であつた。下がつてよい」

国王の言葉を聞き、使いの者は一礼してその場を去つていった。

「さて、待たせたなブレイク伯爵よ。彼らがこれからマーデイク領における城下町の建設を担う者達だ。足りなければ追加の人員を派遣するが……まずは彼らと頑張つてくれ。健闘を祈るぞ。ではな」

国王はクロードの隣で大人しく控えていたルーチエへ軽く目配せすると、オーグストを連れて中庭をあとにした。

国王とオーグストを見送り、クロードは中庭に集められた大工達に向き直る。

「それでは改めて。あなた達がこれから向かうマーデイク領を治める事になった、クロード・ファン・ブレイクです。こちらは俺の婚約者であるルーチエ様。知つていてると思いま

すが、この国の第二王女です。俺には他に何人か婚約者がいますから、あつちに着いたら

紹介します……それでは出発しましょう」

クロードがそう言うと、足元に転移魔法陣が現れる。

そして、彼は大工達とルーチエ、そしてルーチエのお付きのメイドと共に、マーデイク領の領都に『転移』した。

みんなと一緒にマーデイク領へやつて来たクロードは、早速、大工達のうちリーダー格の者数名を集めめた。彼らを領主邸の会議室に連れていき、自身の婚約者達を紹介する。そして、領都の設計図を見せて話し合いを始めた。

「――それで、この図面が俺達があらかじめ考えておいた設計図なんですが……このまま進めいいのか、素人の俺達じゃ判断がつかなくて。意見を聞かせてもらいたいんです」

「ふむ、なるほどな。概ね問題はなさそうだが……」

大工の一人が言葉を区切り、辺りを見回す。

「ところで、この領主邸は誰が作ったんだ？ 作り手の真心が細部から感じ取れる。中々の腕を持つた大工の仕事だと思うが」

その質問に、クロードはアイテムボックスからアモンが作ってくれた建築ゴーレムを取り出した。

「この領主邸と隣に立っている離れを建てたのは、このゴーレム達です。ここにはいない仲間の一人に作ってもらつたんだですが、中々優秀で重宝しています」

建設業者のリーダー達は、その言葉に興味を引かれたらしい。クロードが取り出したゴーレムを隅々まで見て、興味深そうに触つて調べている。

クロードはそんな彼らからアドバイスを受けて細かな修正を加え、領都の設計図を完成させた。

そして、翌日からマーデイク領の領都開発に着工する事を宣言するのだった。

マーデイク領の領都開発が始まつてから、早いもので二週間が過ぎようとしている。

クロードはまず、大工達に居住区の建築に取りかかつてもらつた。アモン製の建築ゴーレムの活動もあり、こちらにはみるみるうちに家が建てられた。領都開発は順調だ。

しかし、最近の彼には気になる事があつた。

どうもこの頃、魔の大森林に生息するモンスターの数が、クロード達がこの地にやつて来た時よりも増えてきているようなのだ。

街を守る結界があるとはいえ、これは由々しき事態だ。

クロードは『守護者の集い』の面々……もとい、自身の婚約者達を領主邸の会議室に集めた。

そして、何故モンスターが増えてきたのか話し合う。

「……まさか、大森林の奥地に強力なモンスターでも生まれたのでしょうか。弱いモンスターが棲み処を追われ、この地に押し寄せてきているのでは？」

ナビーが一つの仮説を口にすると、アリィは頷いた。

「その線もあるけれど……私は新しいダンジョンが出来た可能性を考えているわ。意外と、ナビーと私、両方ともが正しいかもね」

「なるほど……」

クロードは相槌を打ち、考え込む。

「……どちらにしても、厄介な事態になる。しかも、最悪両方の可能性だつて？　ここは俺達で大森林の偵察をした方がいいかもしれない。頑張つて領都開発をしてくれている大工達に余計な心配をかけないように、こつそり、慎重に事を進めよう」

クロードは自身の考えをまとめ、今後の方針を婚約者達に伝えた。

そして、念のため領主邸にはルーチェとパル、ルーチェお付きのメイドに待機してもら

い、仲間と共にこつそり街を出たのだった。

街を覆う結界を出て、大森林に入つてしまはらく歩く。

すると、大森林の奥地からクロード達の方へ向かつてくる大量の気配を感じた。

「……何かがこつちに向かつてきているみたいだ。敵を排除し次第、複数班に分かれて大森林の調査を行う。みんな、よろしくね」

クロードの言葉に、仲間達が頷く。

——ドタドタ、ドタドタ！

クロード達が戦闘準備を整えて少しすると、前方から何かが走つてくる音が聞こえてきた。

「来るぞ。備えろ!!」

そして、ついにその何かが姿を現す。

「グレートスタンプボアの群れ……!?」

「いいえ。それだけではありません。群れの後ろを見てください」

ナビーの言葉で、クロード達は一齊にグレートスタンプボアの群れの後方を凝視した。

「な!? あれは!!

グレートスタンプボアの群れの後方に見え隠れしている巨大な影——その正体はなんと、手負いのSSランクモンスター、黒竜であつた。

「なんでこんなところに黒竜がいるんだ!? しかも手負いで……とりあえず対処しないと！ 結界内にある俺達の領都はともかく、隣領のミーガン領に逃げられたら、向こうの土地で被害が出てしまう」

クロードは一度、遠く離れたミーガン領がある方角を見据えた。

そして覚悟を決めると、自分の武器を構える。

クロード達の目の前まで、グレートスタンプボアの群れが迫ってきた。

「四聖結界!! ——よし。足止め成功だ。みんな!! 行くぞ!!」

ケイトをはじめとする仲間達は、クロードの結界術で足止めを喰らったグレートスタンプボアに一齊に飛びかかった。

突如として出現した透明な壁によつて足止めされたグレートスタンプボア達は、為す術なくケイト達に倒されていく。

あつという間に最後のグレートスタンプボアを倒した一行は、群れの後方からこちらの様子を窺つていた黒竜と対峙した。

グレートスタンプボアの群れを倒し、早数分。

睨み合いが続く中、先に仕掛けたのは黒竜の方だった。

黒竜は傷ついた翼を羽ばたかせ、巨大な竜巻を起こす。

竜巻は方向を違わずクロード達に迫った。そして、彼らを一瞬で呑み込んでしまう。

「ギヤアオオオオオ!!」

クロード達が巨大竜巻に呑み込まれたのを見て、黒竜は自らの勝利を確信したかのよう

に咆哮を上げる。

ところが、巨大竜巻を喰らつた一行は、ドーム状に展開した『四聖結界』によつて事な

きを得ていた。

嵐のように吹き荒れる風の中で、アリがぼそりと呟く。

「まさか初撃にこんな大技を放つてくるなんて。あの黒竜、相当余裕がなかつたのかしら

ね。普通は人間になんて目もくれないでしよう」

「うむ。確かにそうかもしけんのう。しかし、あの黒竜はいつたい何にあそこまで痛めつけられたのかのう？」翼があそこまで傷んでおつては、治つたとしてもなんらかの後遺症

が残るじやろうな。哀れな生を送らせるのは酷じやし、ここで楽にしてやるか」

マールの言葉に、一同は頷いた。

クロードやケイト、ベロニカといつた剣士職の者は、暴風をまき散らす巨大竜巻に向

て、剣を構える。

ナビー、アリ、マルティといつた魔法職の者は、手のひらに魔力を集めた。

レイアやマール、五つ子狼達もまた、集中する。

そして息を合わせ、クロード達は魔力を乗せた斬撃を、ナビー達とレイア達は純粋な魔

力の塊……魔力弾を放つた。

——ズバッ!! ズドン!!

「ギュアアア!!」

竜巻の中から突如放たれた攻撃を、黒竜は間抜けな声を出しながらかろうじて回避した。

一拍置いて事態を理解し、黒竜が地上へ目を向ける。

そこにはもはや竜巻などなかつた。代わりにあるのは、傷一つなくピンピンした様子で立つ、クロード達の姿だ。

クロード達は、斬撃と魔力弾によつて竜巻を霧散させたのだ。

黒竜の困惑顔を見るや否や、『守護者の集い』の面々は一斉に駆け出す。

（この隙を逃すわけにはいかない。ここで一気に片付けさせてもらうぞ!! 黒竜!!）

前衛のクロードとケイト、ベロニカ、レイア、マール、そして五つ子狼達は、後衛のナ

ビーの支援魔法を受け、黒竜に攻撃を仕掛けた。

立ち読みサンプル はここまで

ナビー以外に、アイリとマルティが後衛として残っていた。二人はクロード達が安全に黒竜に接近出来るように、様々な魔法を放つて牽制する。

アイリとマルティの放つた魔法に気を取られ、黒竜が僅かに視線をそらした。

前衛組がその隙に乘じて空中に飛び上がり、黒竜に切りかかる。

「ギヤアアアア!!」

クロード達の斬撃は、なんの抵抗もなく黒竜の体を切り裂いた。耐えがたい痛みに、黒竜は堪らず天に向かって咆哮を上げながら落下した。そして、地面をのたうち回る。

「……みんな、後退するぞ。黒竜との距離を取るんだ……ナビー!! アイリさんとマルティさんと一緒に攻撃魔法を撃つて!!」

後方で待機していたナビーとアイリ、マルティは、クロードの指示を受け、黒竜に追い討ちをかける。

「ドガガガン!!

「ギュアアアア!?」

黒竜は再びの激痛げきつうで昏死もんぜつした。

「今だ!! 豊みかけるぞ!!」

動きが止まつた黒竜を見て、クロードが号令をかける。

全員が黒竜へ駆け寄り、魔斬や魔力弾、魔爪などを叩き込んだ。

かくして黒竜は力尽ぶつちんき、魔の大森林の地に沈んだのだった。

黒竜を倒した頃には、辺りはすっかり暗くなつていた。遅い時間にはなつてしまつたものの、クロード達は無事、領主邸に帰還きかんする。

お風呂に入つて夕食をとり、今はみんなでリビングに集まり、明日の予定を話し合つていた。

「しかし……あの黒竜は明らかに様子がおかしかつたね。SSSランクのモンスターだから、魔の大森林にいる事自体はそう意外じゃないけど……問題は、その黒竜が何者かによつて既に手負いにされていたって事だよな」

「そうね。それは私も思つていた事ね……ねえ。みんなもそうでしょ」

アイリの言葉に、他の仲間達も頷く。

すると、マルティが手を挙げた。

「そこで提案なのですが……黒竜と遭遇した付近の調査を、近日中に改めてやつてみるのいいかがでしようか。これからこの地には領民となる方々が移住してきます。その前に、